



ンゴング・ヒルの風力発電。中央に見えるのはケニア電力開発会社(KenGen)の施設。どちらも森林保護区に指定された区域にある。(2022年8月西崎撮影)



西崎伸子

芸術文化観光専門職大学 / 「野生生物と社会」学会 理事

## ケニアの再生可能 エネルギー開発

東アフリカの「野生動物の王国」として有名なケニアが現在力をいれて取り組んでいるのが再生可能エネルギー開発である。2021年の総発電量のうち、すでに約89%が再生可能エネルギーによるもので、その電源構成比は地熱が約4割と最大で、その他を水力や風力などが占めている (Kenya National Bureau of Statistics, 2022)。首都ナイロビ(人口約450万人)の電力は、ほぼオムルカリア地熱発電所から送電され、国土の約3割の未電化地域 (The World Bank, 2020) の電力ニーズは小型ソーラーパネルなどで一部満たされている。政府は全国への電力供給を最優先課題としているため、未電化地域が送配電網につながる日もそう遠くないであろう。

ところで、アフリカの再生可能エネルギー施設は、地熱発電に限らず、自然保護区に設置されるのがよくある。オムルカリア地熱発電所はヘルズゲート国立公園内に、ナイロビ近郊のンゴング・ヒル風力発電所は、野生動物も息づく森林保護区内にある。ンゴング・ヒルは、都市住民のハイキングで賑わい、また、地元の家畜も放牧されている (写真)。

ケニアの経済発展には、人々の生活(生業)、野生動物保護、観光開発のバランスが重要であると長くいわれてきたが、ここにエネルギー開発が加わることで、土地利用の競合が激しさを増している。再生可能エネルギーには気候変動対策としての意義や「環境にやさしい」イメージが付与されているがゆえに、野生動物・自然環境保全とも調和すると思われがちであるが、本当にそうだろうか。